



ヒップホップ

井高久美子

ヒップホップとは、ラップ、ブレイクダンス、グラフィティ、DJプレイを構成要素とする文化であり、1970年代初頭、ニューヨークのサウス・ブロンクスにて、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック系コミュニティの間で誕生した。ラップは次第に、アメリカのアフリカ系アメリカ人が抱える差別や暴力といった様々な社会問題を表現するようになり、80年代中盤からは、犯罪行為に言及した過激な詩が登場、ギャングスタ・ラップとして認知されるようになる。一方で、アフリカ系アメリカ人の宗教史（キリスト教教会との断絶）を背景として、神への信仰や天国における救済などが歌われるようになる。2000年代にかけて、ヒップホップはヒットチャートを賑わすポピュラー音楽として定着した一方、様々な地域において、その土地独自の宗教、民族、コミュニティと結びつき、東南アジア社会においても独自の進化を遂げてきた。フィリピンでは、スペインによる植民地支配下におけるキリスト教の布教とアメリカ文化の影響を直接的に受け、特にマニラのスラム地区トンドのギャング（義賊）コミュニティによるヒップホップが隆盛をみせている。一方、タイでは、民族音楽との結びつきや、カラワンなど反戦フォークによって政治的メッセージを表現してきた音楽的土壌が、現在のヒップホップシーンの下敷きになっている。そしてカンボジアでは、ポルポト政権下に失われた歌謡曲をリバイバルするようなヒップホップシーンが生まれてきた。

このウェブサイトでは、東南アジアのヒップホップ・シーンを独自に調査しているYoung-Gとのコラボで、主にフィリピン、タイ、カンボジアのラップを紹介する。

参考文献

- 山下壮起『ヒップホップ・レザレクション——ラップ・ミュージックとキリスト教』（東京：新教出版社、2019年）

関連ワード

リリシズム、コミュニティ、スラム、プロテスト、再生